

アメリカ女性服装史：
女性のジーンズ着用の定着にみえる「女らしさ」の変化

蒲田 麻里

**Women Wear Jeans: History of Women's Fashion in America
from the mid-19th Century to the 1970**

Mari Kabata

Abstract

Through the history of jeans in America this essay explores women's fashion and American society from the mid-19th century to the 1970. The sources for this essay are works on women's fashion's history, American women's history, and the history of jeans. This essay argues that women's fashion has been related to the idea of "femininity," and women's fashion has changed along that idea. For instance, the time when women started to wear pants, and more specifically jeans, is a major event in female fashion since jeans, which were originally work clothes for men, had never been worn by women.

Chapter One analyzes the idea of "femininity" seen in women's fashion in the mid-19th century and the birth of jeans in America. In the 19th century, women were not allowed to wear pants because women wearing pants were considered "unfeminine" and a threat to the social order. When Amelia Bloomer invented the "Bloomer costume" and suggested that women should wear pants, feminists embraced the new look. However Bloomer's initiative was much criticized by a lot of people and Bloomers soon disappeared. In the 19th century, women needed to be pious and obedient. Women wore corsets and decorative dresses. Such clothes were meant to enhance feminine beauty, but they limited women's move because they were heavy. This is the time when jeans were introduced in America.

Chapter Two considers new perceptions of "femininity" in the period between 1930 and 1945 when women started wearing pants and jeans. In the 1930s most women wore skirts and very few wore pants. Bloomers became sportswear for women, and this

became a turning point for women's wear. Practical and functional clothes became more important than beautiful dresses, and pants were very practical and functional. Pants were liberating and made women feel free. So, women expressed their need for freedom by wearing pants.

In the 1930s, a few women wore jeans as special clothes. It was a style reminiscent of cowboys working at a ranch. Jeans were born in America in 1871. Jeans were made for workers such as miners, farmers, and cowboys. Cowboys, at the same time with jeans, were romanticized and because of this phenomenon, the Levi Straus Company started to make jeans for women. As women's pants wearing became a fad, it was not strange for women to wear jeans any longer. During World War II, jeans spread all over the world and were worn by a lot of women. When they worked at factories, women wore jeans or pants. A lot of women came to work wearing pants, just like men did. Such fashion reflected the wartime idea that women should be strong and support their country.

Chapter Three argues that between 1946 and 1970, active women and jeans came to indicate the "new femininity." After WW II, the traditional idea of "femininity" came back, and women were expected to stay in household and be a wife or mother who would support their husband and children. The style of women's clothes changed again and was called, very simply, the "New Look." Because of the idea that women should be beautiful and fascinating, women wore corsets and volume skirts again. A lot of women accepted this style, but a few women were blamed for wearing short skirts. Jeans became unisex and were worn by a lot of young people who were children of baby boomers. In the 1950s, young people called the "Beatniks" were skeptical of their society, mass-production and mass-consumption, and they sought "new values." Girls wore jeans and T-shirts and leather jackets, and this style showed their rebel attitude to their conformist society and its "old values."

During the 1960s, jeans became special clothes for young women. Women wore jeans to claim their equality with men and their right to be free. As jeans were unisex wear, they could use jeans to assert their claim. Thus, the new definition of "femininity" is especially visible in that new trend of women wearing jeans.

In conclusion, the fact that jeans became one of women's clothes over time reflected that women gained more freedom and became more equal with men. In every era, women's clothes mirror society's idea of "femininity." As times changed, women sought "new femininity" and took action. New women's fashion played an important role when women came to create "new femininity." Because jeans were originally work clothes, jeans could express classless and genderless freedom. And especially during the

1960s, active young girls' power was at its peak. As jeans became unisex wear, they were established as women's and "ageless" clothes. Through action and new fashion styles, women endeavored to emancipate themselves, get equality with men, and thus modify the idea of "femininity." Jeans were one of the means for women to express their demands for freedom and equality. Establishing jeans as women's clothes indicates the changing meaning of "femininity." Women are more free, equal and active. Jeans has proved an instrumental clothes in women's self-liberation from the 19th century to the present.

序章

どのようにして女性はジーンズをはくようになったのだろうか。現在ではジーンズは階級を越え、年齢・季節に関係なく、ほとんどどんな場でも着用できるようになり、そしてなにより男女関係なく着用しているといえる。現代生活に定着しているジーンズは、アメリカで労働着として誕生したことからその歴史が始まる。ジーンズの歴史はアメリカの歴史とともに歩んできたのである。そこで本論文では、特に女性がジーンズをはくようになる経緯に注目したい。というのも、ジーンズが世界で初めて登場した19世紀中ごろのアメリカでは、女性がズボンをはくことは、批判を受けることであり認められないことだったのだ。ではいかにして女性はズボンをはき、さらに労働着であったジーンズをはくようになっていったのだろうか。

これほど生活に定着しているといえるジーンズについての研究はほとんどないのが実情である。ジーンズの歴史的解説はあるが、数は少ない。その中でも特に音楽学と英文学を専門にしている金沢大学名誉教授の三井徹は、『ジーンズ物語』（1990）において、ジーンズの文化的側面の歴史的変遷を分析している。ひとつの労働着として誕生した衣服がファッションとして普段着に取り入れられるようになるまでがよく分かるものだが、女性のジーンズ着用についての言及は少ない。

また、ジーンズの歴史的変遷を見ているなかで、女性のジーンズ着用を分析している研究は少ない。女性にとってズボンをはくこと、特に労働着であるジーンズを着用することは容易ではなかったはずである。それが徐々に受け入れられていき、やがて女性のジーンズ着用がファッションとして定着していったことはその時々々の女性に対する社会の目や、女性たち自身が変化していったことを表すと考えられる。女性がジーンズを着ることで、それまでの「女らしさ」の概念が覆されていったことを意味しているのではないだろうか。

そこで、本論文では女性のジーンズ着用の定着に至るまでを年代ごとに追うことで、アメリカ社会と女性、ジーンズと女性との関係を分析し、女性がジーンズを着用していく過程における「女らしさ」の変化とジーンズの役割を考察していく。

本論文で女性とジーンズに関してみていく年代は1930年代から1960年代までとする。理由は、1930年代は女性のズボン着用が流行しており、さらに女性向けジーンズが発売さ

れた年代でもあるためである。1970年代以降を含めない理由としては、70年代になると女性のジーンズ着用はファッションとして着用されていくため、ジーンズは「主張する衣服」ではなくなり一般化してしまったからである。ジーンズが広範囲に普及する前の、ジーンズに付加された役割やメッセージがあった時代をみていきたいため70年代以降は含めないことにする。

まず第1章では、ジーンズと女性の関係を探る前提として「女らしさ」と服装の関係性について考察する。主に女性のズボン着用が批判を受けていた19世紀中頃の「女らしい」とされていた服装と、その服装に挑戦したといわれる女性のズボン着用である「ブルーマー・コスチューム」をみることで、女性のズボン着用が定着しなかった当時のアメリカ社会と「女らしさ」を考察し、女性のズボン着用の困難さ、女性の服装に「女らしさ」が求められることを明らかにしていく。またこのような時代にアメリカで労働着として誕生したジーンズの歴史にも触れる。

第2章では1930年代から1945年までの女性のズボン着用とジーンズ着用について、アメリカ社会と「女らしさ」をふまえ、女性のジーンズ着用が徐々に広まる過程をみていく。1930年代は大恐慌時代であり、女性のライフスタイルは大きく変化し、服装も変化した。女性用ジーンズはこの頃に初めて登場するが、いかにして女性はジーンズをはくようになったのか。その後1939年に始まった第二次世界大戦中の女性とジーンズの着用はどのようなものだったのか。女性のジーンズ着用の始まりをみていく。

第3章では、1946年～1970年までのアメリカ社会と「女らしさ」をふまえ、変化した「女らしさ」とジーンズとの関係を明らかにしていく。戦後、女性のライフスタイルは変化し、服装も変化した。1950年代になると、ベビーブーム世代が新しい価値観を模索し、大人に反抗しはじめ、1960年代には公民権運動やヴェトナム反戦運動、女性解放運動が盛んになり、女性の服装はこのような時代とともに変化してきた。同時に「女らしさ」もまた変化し、多くの女性たちがジーンズをはくようになった。どのようにしてジーンズは多くの女性たちに着用されるようになったのか。女性のジーンズ着用が一般化していく過程をみていく。

以上のような構成で、本論文はアメリカにおける「女らしさ」の変化をふまえながら、女性のジーンズ着用の定着にいたるまでを明らかにしていく。

なお、本論文では「ジーンズ」という言葉は、ジーン地、またはデニム地の鋸打ちズボンのことを表すものとする。また、「女性」といっても階級や人種・エスニシティなどによって、多種多様である。なかでも、本論文で主に注目するのは中産階級の白人女性である。

第1章 19世紀アメリカ：服装に求められる「女らしさ」

本章では、女性の服装とアメリカ社会は密接な関係があることを考察し、19世紀のアメリカ社会が理想としていた「女らしさ」が服装にみられることを明らかにしていく。そして社会の理想とする「女らしさ」のために女性がズボンをはくことが難しかったことを明らかにする。第1節でアメリア・ブルーマーによる服装改革が起こる前の女性の服装について述べ、そこにどのような「女らしさ」が求められていたのかを考察する。第2節では、第1節で述べたスタイルに対し革新的なスタイルであったブルーマー・コスチュームについて述べ、このスタイルが誕生した背景やこのスタイルに対する社会の反応から、女性がズボンをはくことの難しさ、当時求められていた「女らしさ」と女性自身の意識の変化を考察していく。また当時ジーンズは女性が着用するものではなかったが、後年女性にとっても不可欠なファッションのアイテムとなっていく。そこで第3節では、前史としてのジーンズ誕生をみていく。

第1節 「クリノリン・スタイル」

19世紀なかばごろ、「クリノリン・スタイル」と呼ばれるファッションが流行した。中流階級の女性に多くみられたこのスタイルは、コルセットと呼ばれる下着と、クリノリンと呼ばれるアンダースカートを使った女性を魅力的にみせるスタイルである。それは女性が美しくみえるようなスタイルであると同時に、「こうあるべき」女性の姿というものが公的に目に見える形で表現されたものであった。

コルセットの着用のねらいは、ウエストをきつく細く締めつけ、バストを押し上げて強調するためである。細いウエストと強調されたバストは男性にとって女性の性的魅力を高めた。その一方で身に着けている女性の身体への悪影響はいくつかあり、肋骨の変形や呼吸の困難などがあった（千村 1997年、90頁）。

クリノリンとは、スカートのボリュームを出すためにスカートの下に用いられた道具で、もともとはペチコートといわれるドレスの裾を広げるための布から始まっている。女性は、膨らんだスカートをつくるためにそのスカートの広がりに合わせてペチコートを重ねて身につけていた。よりスカートを膨らませて広げようとするにはその分のペチコートが必要となった。スカートを膨らませることは、ウエストの細さを強調する効果を求めてのものだった。ペチコートの重ね着のその重さによる身体への負荷はたいへんなものであった。1857年にスプリング・スチール製の軽くて丈夫で曲げやすく、比較的安価なものが製造されるようになった。そのため1850年代のクリノリンはスチール製の輪をちょうちん状にしたものになり、これだけで十分にスカートを広げることができるようになった。しかしこの広がったスカートは体への負担だけでなく大きく場所をとるため、女性の動きも大きく制限した（能澤 1994年、74-75頁；日置 2006年、84-85頁）。

コルセットとクリノリンによる女性の服装は、「膨大な量の生地と装飾品、仕立てのための人手だけでも十分に（能澤 1994年、22頁）」身に着ける女性の贅沢さを表した。また、

自由に動くことはできないため仕事もできず、家での行動範囲も制限され、「そのスタイルが装飾であるばかりか、それを身に着けた女性自身もが、場合によっては生物としての機能を損なわれ、したがって物理的には行動性、精神的には主体性を失い、純然たる装飾と化したのである（能澤 1994 年、23 頁）」。また、「工業化社会以前では、優雅で豪華な衣服の役割は女性を従属的な地位へと囲いこむことではなく、男性の存在感と階級の優位を可視化することだった（Finkelstein1996=2007 年、101-102 頁）」という見方もあり、女性の飾られた服装は、女性の自由を奪う上に、むしろ不自由さえもが男性をひき立てる役割を果たしているということである。つまり、女性の服装の贅沢さはそれだけ男性も贅沢であることを表し、さらにその不自由さから女性の行動の権利は男性が握っていることも表した。このような男性へ従順な女性の姿勢が社会的に求められていたと考えられる（能澤 1994 年、22-23 頁；Finkelstein1996=2007 年、100-102 頁）。

また、この服装をした女性たちは求められている「女らしさ」を自身も認識し、受け入れていたのではないかと考えられる。コルセットとクリノリンの着用はたんに美しさのためというだけではなく、身体自体を装飾するこの服装は女性の性的魅力を高め男性を喜ばせるものであり、そのため男性への性的従属の意味もあるのである。さらに、精神分析学者のヴァレリー・スティールによると、性的従属を意味するようにみえる「ファッションも自発的に身につける以上は、いつも女性が自分から欲望の対象化を引き受ける意志があらわれているはず（Finkelstein1996=2007 年、98 頁）」なのだ。すなわち、女性自身、精神的な主体性は失われていないことになり、男性への性的従属を認識し、それが求められている「女らしさ」であることも認識したうえでコルセットとクリノリンを着用していたのである。この時代の理想とされる女性の姿は「敬虔」で「従順」なものであり、女性もこのような「女らしさ」を認識した上で、実用性よりも女性美や裕福さを表す服装が重要だったのである（Finkelstein1996=2007 年、97-98 頁）。

しかしこのような女性たちがいる一方で、当時は労働者階級の女性や新しい女性の自由のために積極的に社会的な活動をしている女性たちも存在していた。アメリカでは多くの女性が工場で働いており、また奴隷制廃止運動にもなって女性の自由を求める運動が起り始める。その中でもアメリア・ブルーマーの服装改革に注目したい。彼女はクリノリン・スタイルが全盛期だったころにスカートの下にパンツをはくというスタイルを提案した。彼女の服装改革は社会にどのような影響を与えたのだろうか。

第 2 節 「ブルーマー・コスチューム」

本節では、クリノリン・スタイルが「女性らしい」服装とされていた 19 世紀なかばのアメリカで、女性のパンツ着用という革新的なスタイルを提案したアメリア・ブルーマーと、そのスタイルであるブルーマー・コスチュームについてみていく。女性がズボンをはくことはいかに難しかったのだろうか。そこからみえる当時のアメリカ社会が求めていた「女らしさ」とはどのようなものだったのだろうか。

ブルーマー・コスチュームは 1851 年、ニューヨーク州セネカ・フォールズで誕生した。そのスタイルは膝下丈のスカートの下にゆったりと膨らんだズボンをはくというものであった。この服装は新聞にも掲載され、アメリカだけではなくイギリスでも話題となり、大きな反響を生んだ。賛同する女性たちがいる一方、非難したりからかったりする者もたくさんいた。多くの反発によりブルーマー・コスチュームは女性の日常着として定着することではなく消えていってしまうことになる（濱田 2009 年、110-111 頁）。

このスタイルのそもそもの誕生は、ブルーマーの友人であるエリザベス・スミス・ミラーの服装がきっかけであった。ミラーは、当時女性の権利向上のために運動し大きな影響力を及ぼしていたエリザベス・ケイディ・スタントンのいとこであった。ブルーマーとスタントンは友人であり同志的な関係であった。ブルーマーはスタントンと知り合うようになったことで、女性の解放運動にも目を向けるようになった。その後 1849 年にブルーマーは自身で機関誌『リリー』を発行し始める。禁酒や女性の権利などに関する記事を掲載した同誌はフェミニズム運動の機関誌となっていき、大きな影響力を持っていった（濱田 2009 年、110 頁；日置 2006 年、93-94 頁）。

ミラーは 1850 年、旅行でスイスを訪れた際、スイスの結核療養所で女性たちがトルコ・パンツをはきその上に膝丈の短いスカートをはいていたのを見た。その服は医師が、コルセットによるきつい締め付けの影響と、運動不足で入院していた女性の体を解放するために考案したものであった。ミラーはこの服装をまねして服を仕立ててもらい、そのままアメリカに帰国したのである。ブルーマーはこのスタイルを見て気に入り、すぐに同じようなスタイルをし始めた。ブルーマーがこの服装を『リリー』に掲載すると、たいへんな反響を生んだ（日置 2006 年、99-100 頁）。

ブルーマー・コスチュームは多くの女性の賛同を得たものの、当時のアメリカでは女性のズボン着用は非常に難しかった。特に男性の反発はすさまじかった。女性たちにとっては、ブルーマー・コスチュームは非常に実用性のある服装だった。女性たちは、きついコルセットと場所をとる上に重たいクリノリンから解放され、活動的になることができた。積極的に外へ、社会へ出ていくようになった。こうした女性たちを男性は脅威に感じ、不快に思ったのである。女性がパンツをはくことは「女らしさ」を放棄し社会に反抗しているとみなされた。たとえばスタントンの父親は、「自分の娘が黒のサテンの膝上丈の短いスカートとパンツをはいていると聞いて怒り狂って手紙を書いた（日置 2006 年、101 頁）」という。この 2、3 年後、スタントンは父親や友人の非難を受け続けた末に長いスカートに戻るようになった。一方ブルーマーやミラーはたくさんの非難や嘲笑に耐えながら、6、7 年程ブルーマー・コスチュームを着続けた（高橋一郎・荻原美代子・谷口雅子ほか 2005 年、70 頁；濱田 2009 年、114 頁）。

ブルーマー・コスチュームに対する非難の原因は、このスタイルが「女らしくない」とされたからだけでなく、それが特に女性解放運動や奴隷制廃止運動の女性たちの支持を得て着用されるようになったからである。それは運動のコスチュームのようにもなった。「多

くのフェミニストたちが、女性運動の大会の時にブルーマー服を一時的ではあるが、制服のように着るようになった（日置 2006 年、103 頁）」のだ。そのため「女性がより自由に動くためにパンツをはくというドレス改革運動は、政治や社会を危険にさらす動きと見なされた（Finkelstein1996=2007 年、124 頁）」のである。よってブルーマー・コスチュームは女性の自由、権利向上を求める運動の一部として捉えられるようになった。そのためブルーマー・コスチュームへの批判は、やがて女性参政権運動などへの批判となり、運動を効果的に行っていくために女性運動家たちはブルーマー・コスチュームを脱いでいくこととなった（日置 2006 年、103 頁；濱田 2009 年、116-117 頁）。

ブルーマー・コスチュームの流行は短く、女性の新たな服装として定着することはなかった。このスタイルはファッション性に乏しかったため、女性からの支持も少なく、むしろ男性の服装であったズボンをはくことに抵抗を持つ女性が多かった。ブルーマーは、男性の服を女性が着て男女平等を訴えるというよりは、コルセットにクリノリンという身体的にもきつく、自由に動くこともできない重たい当時の女性の服装から実用的な服装の着用を女性に提案したかったのである。しかし 19 世紀アメリカでは、女性の服装は女性が美しくみえることが重視されており、「女らしい」服装を着ることが大切だったのである。たとえ実用性があるといっても、男性の服装としてあったズボンを女性がはくことは社会から猛烈な反発を受けたのだ。その後女性の服装はコルセットと、改良されたクリノリンによるドレスに戻っていった（濱田 2009 年、117-118 頁）。

第 3 節 ジーンズの誕生

「ジーンズ」という言葉が現在思い浮かべるようなズボンを指す言葉となったのはそれほど昔のことではない。まず、ジーンという布地が中世からあった。この布地を使って衣料が作られるようになると、19 世紀初めごろからジーンという言葉は布地ではなく、ジーンで作られた服を指すようになっていった。19 世紀後半にはジーンズという複数形が登場し、ジーン地の衣服を指す言葉となっていった。つまり、ジーンという生地から「作ったズボンをジーンズと呼ぶ語法は、すでに十九世紀の半ばには生じていた（三井 1990 年、39 頁）」のである。もうひとつ、デニムという布地があり、19 世紀中ごろからデニム地の服のことを指す言葉として使われていた。ジーンとデニムの生地は似ており、どちらもあや織りの綿布である。その 2 つの「違いはジーンの方が細いあや織りであり、短い毛羽が立っているということ（三井 1990 年、41 頁）」である。デニム地から作られた衣服の中にはズボンもあり、そうした衣服はデニムズと言われていた。しかしデニムズという言葉はあまり広く使われておらず、ジーンズの方が広く使われていたため、次第にデニム地の衣服も含まれるようになり、「ジーンズ」はジーン地だけでなくデニム地のズボンも指すようになっていった（三井 1990 年、34-43 頁）。

1871 年、鋸打ちのズボンであるジーンズの第一号が誕生した。ジーンズは、リーヴァイ・ストラウスによって発明されたと広く考えられているが、はじめにジーンズと言われるよ

うになるズボンを作ったのはジェイコブ・デイヴィスである。デイヴィスはアメリカ西部の田舎町リーノウで仕立屋を営んでいた。馬用のブランケット、荷馬車のカバーやテントを作っていた。布地はズック地をリーヴァイ・ストラウス社から買っていた。1871年、ある労働者の妻がデイヴィスを訪ね、夫が大男で、仕事が樵であるためにサイズが合った丈夫なズボンが欲しいと依頼した。そこで、デイヴィスはテント地を使ってズボンをつくり上げた。そしてポケットを破れにくくするために、たまたまテーブルに転がっていた鋸（リベット）を使うことを思いついた。デイヴィスは鋸をポケットの四隅に打った。鋸は、馬のブランケットを作る作業の際に使うものであった。その時はそれだけのことであったが、後に評判が広がっていき、デイヴィスの鋸打ちズボンの注文が増えていった。やがて商売がうまくいくと、デイヴィスは他人に自分のアイデアが盗まれないように特許を取ろうと考える。しかし特許を取るには多くの費用と手続きが必要であった。そこでデイヴィスは生地仕入れ先であったリーヴァイ・ストラウス社と組むことを考えた。リーヴァイ・ストラウス社はこの申し出を受け、1873年、デイヴィスに対して特許権が認められることとなった。同年からデイヴィスはリーヴァイ・ストラウス社で新たに作られた製品部門を担当することになり、デイヴィスが監督となってポケットに鋸が打たれたデニム地のズボンが本格的に製造され販売されていくことになった（三井1990年、17-28頁）。

こうしてデイヴィスが一人でやっていた商売がリーヴァイ・ストラウス社によってアメリカ西部全域に広げられるようになったのだ。ズボンだけではなく、コートやジャンパーなど品目も増やしていき、工場も拡張していった。しかし1890年にこの鋸打ち衣料の特許の有効期間が切れたため、誰でも製造、販売できるようになり、このスタイルはますますアメリカ中に広まっていった（三井1990年、28-31頁）。

当初リーヴァイ・ストラウス社はジーンズのことを「ジーンズ」ではなく「オーヴァオール」と呼んでいた。そしてその着用者の対象は農夫、職工、鋸夫、労働者一般の人々であった。そのため、ズボンの形の「オーヴァオール」もあれば、胸当てにズボン吊りのついたズボンの形もあり、働く人の作業着として服と体を保護する役割があった。服を保護するというのは、「オーヴァオール」の用法として服の上から重ねて着ることもあったのだ。リーヴァイ・ストラウス社は「オーヴァオール」という言葉を長いあいだ使ったのちに、1950年代から「ジーンズ」という言葉を使うようになった（三井1990年、43-46頁）。

ジーンズはこのようにして19世紀後半に労働着としてアメリカで誕生した。女性の自由と権利を求める動きが芽を出すこの同じ時代に、労働着としてアメリカで誕生したこの衣服はのちにアメリカ社会とともにそのスタイルを時代に合わせて定着させていき、女性のファッションにも不可欠なものになっていく。しかし、女性がズボンをはくことが認められていなかった19世紀以後、ジーンズはどのようにして女性に着用されるようになり、一時の流行ではなくスタイルとして定着していくのだろうか。このことについては、次章でみていく。

第2章 1930～1945年：女性のジーンズ着用の始まり

第1章では、19世紀半ばの社会が求めていた「女らしさ」と女性の服装をみてきた。一方で同時代に労働着として誕生したジーンズの歴史もみてきた。ジーンズが誕生した19世紀半ばのアメリカでは、ズボンは男性の服装だったため、女性がズボンををはくことは非常に難しかった。ではどのようにして女性はズボンをはくようになり、そしてジーンズもはくようになったのか。本章では、女性がズボンをはくようになる経緯を概観し、女性のズボン着用が定着するころに女性のジーンズ着用が始まる経緯を当時のアメリカ社会と「女らしさ」をふまえながら考察していく。第1節では、20世紀はじめに女性がズボンをはくようになっていったことに触れ、リーヴァイ・ストラウス社が初めて女性用ジーンズを発売した1930年代アメリカにおける女性とジーンズの間をみていく。第2節では、第二次世界大戦中である1940年から1945年のアメリカにおける女性とジーンズの間をみていく。そして女性のジーンズ着用にいたる当時の「女らしさ」を考察していく。なお、前章で述べたように、この時代ではリーヴァイ・ストラウス社はジーンズのことを「オーヴァオール」と呼んでいたが、以下「ジーンズ」と表記し、胸当てにズボン吊りのついたズボンを「オーヴァオール」とする。

第1節 1930～1939年：女性用ジーンズの誕生と大恐慌

第1項 女性のズボン着用と「新しい女」

女性がズボンを抵抗なくはくようになるのは、ズボンがスポーツウェアとしてあったからである。19世紀末ごろ、「新しい女」と呼ばれる女性たちが誕生した。これまでの男性に「従順」で、一人ではなにもできず男性に頼って養ってもらうような「か弱さ」のある女性ではなく、自ら社会に出て自立し自由を求めて行動する女性である。特に、スポーツを楽しむようになった女性たちに代表される。というのも、スポーツは男性だけに許された娯楽だった。女性が男性と同じようにスポーツをするのは「女らしくない」ことであり、当時は考えられないことだった。しかし19世紀末頃、女性も楽しめるような新しいスポーツが誕生しはじめ、徐々に女性たちもスポーツに参加するようになっていった。その際の服装は、コルセットを着用したもので、スカートも長いドレスであった。当時女性の服装は機能性を重視したものではなく、美しい装いであることを重視していたのだ。しかしそれでは動きにくくスポーツウェアとして適さないため、女性服を改良した服装が誕生し、それは過度な装飾をなくしたシンプルなものになり、重い布地を使わず動きやすい簡素なデザインで、機能性を重視したものになった。しかし彼女たちはまだスカートを着用しており、その長さは変化していったものの、ズボンをはいていたのは一部の女性たちだけであった。女性が本格的にズボンをはくようになったのは、自転車が生み出しサイクリングが大流行したことと関係する（佐々井2003年、126-129頁；日置2006年、121頁）。

19世紀末のサイクリングの流行は、『自転車に乗る女』は『新しい女』の別名（日置2006年、114頁）」というほど、これまでの「女らしさ」を変化させた。自転車の、自分で進路

を決めて自由にどこへでも行くことができるところが、女性の求める行動の自由や精神の解放へとつながったのである。その流行にともなって服装も変化した。女性たちは装飾の多いロングドレスを着て自転車に乗っていたが、ロングドレスは邪魔であり、自転車にからまる危険性もあったため、ふさわしいサイクリングウェアとしてブルーマースタイルが用いられるようになった。「ブルーマー・コスチューム」はスポーツウェアとして定着していくのである。当時女性はパンツスタイルで自転車に乗ることを禁止され、ズボンの上に必ずスカートを着用しなければならなかったが、この動きやすく解放感のあるブルーマースタイルは自転車に乗るような「新しい女」に受け入れられていったのだ（日置 2006 年、113-114 頁, 126 頁）。

女性がズボンをはくことはスポーツウェアから始まり、徐々に定着していくが、それは一部の女性たちだけであり、まだ街中での着用は認められていなかった。ただし、まだ「女らしい」服装として好まれていたのは見た目が美しい装飾のされたドレスであったとはいえ、女性の服装に、男性の服装を改良したものや機能性、実用性を重視した服装が取り入れられるようになったことは大きな進歩であった。

第 2 項 特別な服装だった女性のジーンズ

1929 年、大恐慌が起こり、世界中が経済危機に陥った。「不況の 30 年代」のはじまりである。経済危機による人々の不安から社会は保守的になっていき、女性の服装にも影響を与えた。1920 年代頃に理想とされていた自由奔放なスタイルは後退していき、女性は再び落ち着いたおとなの女性であることが求められたのである。男性たちは「女性を昔のように女性らしくしよう（Evans1989=1997 年、316 頁）」と考え、性差別や暴力と結びつくこともあった。女性の自立はよりいっそう困難になり、女性の社会運動で活発なものは消滅していった。経済危機と政治や社会への不安は莫大なものであり、そのなかで「女性は自分の役割を感じとり、伝統的な服に着替えて、男性の庇護のもとに身を置くことにした（du Roselle1980=1995 年、262 頁）」のだ。彼女たちは「女性のいる場所は家庭で、男性に養われるべきだった（Evans1989=1997 年、324 頁）」と考え、第一次世界大戦後に外へ出た女性たちの「女らしさ」はまた変化した（日置 2006 年、186-187 頁； du Roselle1980=1995 年、262 頁； Evans1989=1997 年、316-317,324,328 頁）。

しかしその一方で、「伝統的に男性が優れているとされる飛行やスポーツや科学も、1930 年代になって女性に開かれ（Kava and Bodin1983=1992 年、205 頁）」るようになり、女性のズボン着用が定着してきた。スポーツウェアは 30 年代になると、街中で着るような日常着にも影響を与え始めたのだ。自転車は、中流階級の人たちが楽しんでいたが次第に彼らは自動車に乗るようになったため、自転車は大衆のスポーツとなった。若い女性たちは自転車に乗る際にショートパンツをはいた。このショートパンツは当時まだ「この時代のいかがわしい女たち、つまり解放された自由な女たちのユニフォームとされ（du Roselle1980=1995 年、267 頁）」、一般的には受け入れられていなかった。一方で、夏の浜

辺で着るビーチ・パジャマ¹は瞬く間に普及していった。夏の浜辺では自転車の影響でショートパンツをはいた女性が増え、さらにビーチ・パジャマ姿の女性も増え、女性のズボン着用が広まっていった。こうしてパンツスタイルは一般化し、30年代終わりごろになるとゴルフの服装や週末の外出着にズボンが加わり始めるなど、スポーツウェアは日常生活の服装に溶け込み、男性的とされていたズボンも女性の普段着として徐々に溶け込んでいったのである（du Roselle1980=1995年、266-267,270-274頁；日置2006年、188頁）。

リーヴァイ・ストラウス社が女性用ジーンズとして「レディ・リーヴァイ」を発売したのはそうした30年代の終わりごろ、1938年のことである。当時、女性のズボン着用は流行し一般化していたため、リーヴァイ・ストラウス社はその販路を本格的に女性へと広げるため製造したのである。このことによってより多くの女性がジーンズをはくようになったのだ。とはいえ、これが女性のジーンズ着用の始まりではない。リーヴァイ・ストラウス社の女性用ジーンズ発売以前でも、一部の女性たちはジーンズをはき始めていた。それは当時、ズボンの流行と同時にジーンズのカウボーイイメージが定着することによってジーンズの労働着というイメージからおしゃれな遊び着になったからである。この背景には大恐慌が密接に関係している（能澤1994年、106頁；三井1990年、68-69頁）。

まず、当時ジーンズは働く男性たちの労働着だったが、特に「ほかの労働者と違って、物語、漫画、歌それにとくに映画によってすっかり美化され、憧れの対象にされてきているのはカウボーイ（三井1990年、56頁）」だった。当時の西部劇映画に登場する人物の多くがジーンズをはいていたことにより、ジーンズには「大西部、西部開拓、カウボーイ」のイメージが結びついたのである。リーヴァイ・ストラウス社はこのイメージを利用して実際に宣伝しており、その宣伝は効果的であった上に、リーヴァイ・ストラウス社の製品と「大西部、西部開拓、カウボーイ」のイメージを結びつけることとなった。ジーンズはただの労働着ではなく、美化された労働者「カウボーイ」の労働着となることで、ジーンズ自体のイメージも美化されたのであった（三井1990年、56-68頁）。

さらに「デュード・ランチ」が流行することで、よりいっそうジーンズは美化された労働着となった。「デュード・ランチ」とは、大恐慌の影響を受けた牧場が休暇で西部を訪れる東部の観光客を招き、彼らに牧場での暮らしを体験してもらおうというものである。彼らは家族でやってくるのが多く、また大半は裕福であった。この際に東部の人たちはジーンズを着用するためにリーヴァイ・ストラウス社のジーンズを注文するようになった。そこでリーヴァイ・ストラウス社は刺繍を施した西部イメージのシャツも開発して販売し、自社のジーンズと合わせて「ウェスタン・ウェア」を提案した。デュード・ランチは流行し、この「ウェスタン・ウェア」も西部から東部に徐々に広まっていった。こうしてジーンズも「西部開拓、カウボーイ」のイメージを伴いながら東部へ広まっていったのである

¹ 「ショートパンツとは対照的に、長いズボンと、背中を大きく開けた上衣との組み合わせ（Bruno du Roselle1980=1995年、267頁）」であり、当時ではショートパンツに比べると、男女平等を主張しつつもまだ女性らしい上品さがあったと考えられる。

(三井 1990 年、69-74 頁)。

「デュード・ランチ」の流行は、女性、特に東部の女性たちのジーンズ着用を促進させた。1928 年 6 月号のアメリカの『ヴォーグ』誌には、当時人気だった映画女優がジーンズをはいている写真が載っている。この時女性たちがはいていたジーンズは「全体に細身でなく、ゆとりがある (三井 1990 年、73 頁)」ものだった。そこでリーヴァイ・ストラウス社は女性用のジーンズである「レディ・リーヴァイ」を 1938 年に開発し、ジーンズと合わせて布地がサテンのシャツを着ることを提案した。これが「デュード・ランチ・ファッション」なるものだった。こうして一部ではあるが女性のジーンズ着用がはじまり、それはおしゃれな服装としてあったため、女性たちもジーンズを受け入れやすかったのである。ジーンズと労働着のイメージが拭い去られたのではなく、「それは魅力的な労働者、カウボーイと結びついたために、むしろその衣服の魅力となっていた (能澤 1994 年、106 頁)」のだ。そのため女性のジーンズ着用は特別なときに着るような服装で、コスチュームのような感覚で始まったのである。そしてちょうど当時、一部の女性の服装が、スポーツの影響から動きやすくシンプルなものになり、ズボン着用が一般化しつつあったなどの背景があったことも女性のジーンズ着用を促進させることに一役買ったと考えられる。しかし「レディ・リーヴァイ」はデニム不足から発売が中止されることとなり、その再開は戦後の 1950 年代を待たなければならなかった (三井 1992 年、71-74 頁; 出石 2009 年、80-81 頁; 能澤 1994 年、106 頁)。

以上のように、女性用ジーンズが発売される 30 年代には、女性は一般的に長いスカートをはき、コルセットも復活し、「自由」や「解放」から離れ、再び男性の庇護のもとに戻ることを選んだのであった。それは大恐慌による社会の不安がもたらした考えだった。安定を求めた社会は、20 年代に理想とされた「自由で解放的な女性」ではなく、「従順でか弱く、上品な女性」を新たな理想像としたのである。

一方で女性のジーンズ着用は、ズボンをはく流行と、「デュード・ランチ」の流行という背景があったからこそであり、さらに一部の女性たちが「自由」と「解放」を求めていたことが大きく関係しているのである。労働着ではなくおしゃれで動きやすいウェスタン・ウェアというジーンズのイメージは、当時の女性にとって新しいアメリカのファッション・スタイルであり、「新しい女」と結びついた。しかし「レディ・リーヴァイ」を受け入れたのが一部の女性たちだけだったことは、まだ多くの女性たちがズボンに対して抵抗を感じていたからである (能澤 1994 年、106 頁)。

第 2 節 1940～1945 年：第二次世界大戦中の「女らしさ」とジーンズ

第二次世界大戦が始まると、第一次世界大戦の時代と同様に、多くの女性たちが工場や戦場に駆り出された。「女性にはふさわしくないとかつてみなされた活動が、突然愛国的義務となり、女性にまったくふさわしい仕事となった (Evans1989=1997 年、348 頁)」のである。理想の女性像は大きく変化した (Evans1989=1997 年、347-348 頁)。

第二次世界大戦は女性の服装に大きな影響を与えた。戦場や軍需工場で働く女性の服装は非常に機能性が重視されていた。軍隊の補助部隊で働く女性も多かった。彼女たちが着用する制服は、部隊によって異なっており、なかにはズボンを取り入れている部隊があったのだ。「空軍を援護する看護婦のすべてが作業用のオーバーオールを着ていたし、野戦部隊のあとについて移動する部隊では女性も戦闘服を着ていた (du Roselle1980=1995 年、309 頁)」のである。スカートをはく女性もいたが、駐屯地で働く女性だけであった。軍需工場で働く女性たちはオーヴァーオールやジーンズを着用し、ズボンをはいていたのである (du Roselle1980=1995 年、309 頁 ; 日置 2006 年、207 頁 ; 濱田 2009 年、222 頁)。

こうして国のために働くことが求められ、工場や戦場で働いていた多くの女性たちの間にもジーンズが広く着用されるようになった。ジーンズには「国のために働く人」のユニフォームというイメージが結びついたのである。特に、働く女性とジーンズを強く印象に残したといえる絵がある。「リベット打ちのロージー」は「雑誌の表紙や広告を飾り、防衛産業で働く市民的、愛国的義務は、伝統的女性らしさを傷つけることはない」と強調 (Evans1989=1997 年、351 頁)」するもので、当時アメリカで有名になった女性である。アメリカのイラストレーターであるノーマン・ロックウェルが 1943 年 5 月 29 日号の『サタデー・イブニング・ポスト』誌の表紙に描いたこのロージーの絵は、腕がたくましく大きく、「ダンガリーとおぼしき半袖のワーク・シャツに、ブルー・デニムのオーヴァーオールズを身につけている (出石 2009 年、118 頁)」ものである。ロージーは、「第二次世界大戦中、軍需工場の華と謳われた女性 (出石 2009 年、119 頁)」で、多くの女性たちは軍需工場で働くことが「女らしさ」を傷つけることではないと考え、そして自分たちは国の役に立つために必要な存在であると考えたのである。そしてその際に着るジーンズにも、「女らしさ」を傷つけるものではないというイメージが結びつくことになったのであろう (Evans1989=1997 年、351 頁 ; 出石 2009 年、118-119 頁 ; 三井 1990 年、104 頁)。

一方、戦場に行かなかった女性や、工場で働いていない女性たちの服装は地味でいかめしいものだった。女性の服装は軍隊の制服の影響を受け、「一般の女性服に、いかつい軍隊調のテーラードスーツが多くなった (日置 2006 年、207 頁)」のである。この服装は「膝丈のストレート・スカートと、直線ラインの腰までの短いジャケットの組み合わせで、Vゾーンは浅く、ラペル (折り返し襟) は小さかったが、肩は軍服のように肩幅が広く、非常に厳めしい服 (日置 2006 年、207 頁)」だった。30 年代で長くなったスカート丈は再び短くなったが、これは「労働に適してはいたが、生地不足から、そうせざるを得なかったのである。だから、女性解放という意味では短いスカートよりもズボンにそれが表れていた (du Roselle1980=1995 年、332 頁)」のである (日置 2006 年、207-208 頁 ; du Roselle1980=1995 年、332 頁)。

しかし、ズボンやジーンズをはくことが作業着として定着することで働く人の「ユニフォーム」となると、そこに自由はないし、性の解放が表れているとは言いがたい。だがズボンやジーンズをはくことは、多くの女性に服装に対して実用性や耐久性、機能性を重視

する新たな視点を与えた。戦争によってジーンズがアメリカ中に広まり、女性にも広く着用されるようになったことは、以後の女性の服装とジーンズを語る上では非常に重要である（出石 2009 年、112 頁）。

以上でみてきたように、19 世紀末から 1945 年までのアメリカにおける女性の服装は「女らしさ」の変化とともに変わっていった。女性のジーンズ着用の始まりには、大恐慌による「デュード・ランチ」の始まりと、当時のズボン着用の流行が関係していたのである。女性のズボン着用には「女らしさ」の変化が表れていたが、ジーンズ着用は当時まだ特別着として存在していただけだった。第二次世界大戦が始まると、多くの女性たちが働き始め、「女らしさ」は変化し、それに伴い女性の服装も変化した。地味でシンプルな服装になり、働く女性たちはズボンやジーンズをはいたのだ。

では戦後のアメリカにおける女性の服装と「女らしさ」はどのようになっていくのだろうか。そして女性にとって特別着であったジーンズ、作業着となったジーンズはいかにして女性の普段着として広まっていくのだろうか。

第 3 章 1946～1970 年：戦後の女性とジーンズ

女性のズボン着用には女性の「自由」と「解放」を求める意識が深く関係している。しかし、同じズボンであるが男性の労働着であったジーンズを女性が着用することには、異なる意識が関係しているのではないだろうか。そこで本章では、戦後のアメリカ社会と「女らしさ」の変化をふまえ、ジーンズが広く女性のファッションとして定着していくまでを考察していく。第 1 節では 1946～1960 年のアメリカ社会で理想とされていた「女らしさ」とその服装を考察し、どのような女性がジーンズをはいたのかをみていく。第 2 節では 1961～1970 年のアメリカ社会における女性の服装の変化、「女らしさ」の変化とジーンズの関わりを考察し、女性のジーンズ着用の定着化にみえる女性の意識を考察する。

第 1 節 1946～1960 年：第二次世界大戦後の女性とジーンズ

第 1 項 ニュー・ルックと「女らしさ」の復活

1947 年、クリスチャン・ディオールが新しいファッションスタイルを発表した。それは「ニュー・ルック」と名づけられ、そのスタイルの新しさはアメリカでも注目を浴びた。肩はパッドがなくなりゆったりとなだらかで自然な線を描き、襟元が V 字型に開くことですっきりとバストラインが目立ち、スカートは長く、ウエストは細く絞られ、スカートは裾までたっぷり広がっていた。これは戦時中の地味でストイックな服装とは正反対であった。この「女性らしさ」を改めて強調するようなスタイルは、「長い耐乏生活中に心に秘めていた女性の繊細な感覚を目覚めさせたよう（日置 2006 年、209 頁）」で、「女性が闘士ではなく、男性の保護を必要とする弱い存在だったころの女らしさへの逃避を映しだしていた（du Roselle 1980=1995 年、332 頁）」のである。さらにアメリカにおける「ニュー・ル

ック」は、そのままアメリカン・ファッションに持ち込んだのではなく、「アメリカ型の実用性を組み込んで、アメリカン・スタイルに仕上げていた（濱田 2009 年、214 頁）」ので、アメリカの大衆消費社会・生活様式に浸透していった（佐々井 2003 年、146-147 頁；日置 2006 年、208-209 頁；濱田 2009 年、214-215 頁；du Roselle1980=1995 年、331-332 頁）。

「女らしさ」にあふれたニュー・ルックは一部の人から激しい反感を買ったが、そうした反感は長く続かなかった。なぜなら「女らしさ」の考えが復活したからである。「幸福だった過去の時代に戻って、そこにあった女らしい衣服を身にまとうことを夢みた（du Roselle1980=1995 年、332 頁）」女性たちは、戦後再び忘れていた「女らしさ」を意識するようになったのである。そのためニュー・ルックの長いスカートは 1950 年になっても着用され続けた。ニュー・ルックのスタイルは「女性らしさと男性らしさの違いを再び明確に強調しはじめたことをはっきりと示すシンボル（Evans1989=1997 年、379 頁）」となったのである（日置 2006 年、210-211 頁； du Roselle1980=1995 年、331-332 頁； Evans1989=1997 年、379, 386 頁）。

「女らしさ」の復活には、家族の在り方が大きく関係している。戦後、女性は家庭に戻るべきとされ、多くの女性は自発的に、または強制的に仕事を辞めて家庭へと戻った。まだ経済的復興もしていない不安定な社会に加えソ連との冷戦が始まると、これまで以上に女性は主婦であること、母親であることが女性の理想として掲げられ、戦争から戻った夫を迎え、家事をこなすことを求められたのである。1950 年代はベビーブームによって家族が重視された時期でもあった。郊外には続々と家が建てられ、上流階級から労働者階級までもが家を購入するようになり、新しい家族が次々に生まれたのである。女性がこのように家庭をもち主婦、母親であろうとしたのは、そうすることが社会から求められていただけでなく、女性自身もそうすることが良いと判断したからである。50 年代の母親は、「家庭を将来の市民をつくりあげる場とみなすのではなくて、社会に安定をもたらす基礎と考えていた（Evans、1989=1997 年、385 頁）」のである。さらに家庭をもって家族を家庭内から養っていく女性の姿は「世界の安定と安全の象徴（Evans1989=1997 年、382 頁）」とされるほどであった。しかしこうした考えは同時に女性を上手く家庭へ封じ込めることにもなった（Evans1989=1997 年、372-376, 380-385 頁；Kava and Bodin1983=1992 年、218-221 頁,227 頁）。

ニュー・ルックのスタイルは、このような時代の女性の姿勢と合致するものとなった。長いスカートは少女のような服装ではなく成熟した、落ち着いておごそかな雰囲気を示し、女性の着用は続いていたが、ふくらんだスカートは『赤ちゃん人形』のようなイメージ（Evans1989=1997 年、386 頁）」をかもしだしていた。当時の女性の服装は女性的である傾向にあったのだ（Evans1989=1997 年、386 頁；Steele1991 年、118 頁）。

第 2 項 若い女性とジーンズ

女性が家庭へ戻ることが求められた一方で、戦時中に働いていた女性の中には戦後も働

き続けることを希望する女性たちも多くいた。しかし職場の環境は決して良いものではなく、男性の仕事と女性の仕事というように性の違いで仕事を区別されたり、低賃金の環境で働くことになったが、それでも女性は働くことを望んだ。理想として描かれる幸せな「中流階級」の家庭の裏には苦しい現実があり、そんな母親を見て育った子供たちは 50 年代半ばになるとティーンネイジャーの世代となり、豊かな物質社会の裏にある問題に目を背けているアメリカに対して疑問を持ち始め、新しい価値観を模索し始めたのである (Evans1989=1997 年、394-409 頁 ; du Roselle1980=1995 年、380 頁)。

こうした子供たちが「ビートニク」と呼ばれる若者であった。ビートニクはアメリカだけでなくヨーロッパにも大きな影響を与えた。彼らは「俗に〈アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ〉と呼ばれるアメリカ文明そのものを疑問視する知的な若者たち (du Roselle1980=1995 年、380 頁)」で、社会や親に強いられた生き方ではなく自分たちで考え生きていこうとし、その反抗を服装で示したのである。慣例的な服装規範には従わず、ビートニクは当時労働着であったジーンズまたはカーキ色の綿パンツに、シャツまたはセーターにノー・ネクタイ、革のジャンパーを日常着とした。この服装は「社会に背を向けて生きる知的な若者たちのユニフォームとなった (du Roselle1980=1995 年、381 頁)」のだ。彼らのファッションは世界で、また大人にも受け入れられるものになった。特にジーンズと革のジャンパーは 60 年代にかけて多くの大人たちのカジュアルウェアとなるほどだった (濱田 2009 年、216-217 頁 ; 日置 2006 年、225-227 頁 ; du Roselle1980=1995 年、380-384 頁)。

さらに注目すべきは、このジーンズに革のジャンパーというビートニクのスタイルは、男性だけでなく若い女性の間でも人気があったことである。彼女たちは新しい「女らしさ」を体現していた。1950 年代は女性の抗議運動が弱く、目立つことはなかったが、そこにビートニクの若い女性たちは新しい価値観を模索しつつ女性も男性と同じような服装をすることで、「平等」の存在であることを表したので。このジーンズと革のジャンパーは最初のユニセックスな服装となった。そこには新しい「女らしさ」があり、それは「恋人が戦場から帰るのを家でじっと待っているような女でなかった (du Roselle1980=1995 年、385 頁)」が、「男女平等につながる、はしごの重要な一段をよじのぼっていた (du Roselle1980=1995 年、385 頁)」のだ (三井 1990 年、110-124 頁 ; du Roselle1980=1995 年、384-385 頁 ; Evans1989=1997、408-409 頁)。

第 2 節 1961～1970 年：新しい「女らしさ」と女性にとってのジーンズ

第 1 項 服装に表れる性の解放

1960 年代は、20 世紀のファッションを語る上でとても重要な年代である。この頃多くの若者が社会に出て力を持つようになった。戦後アメリカでも驚異的なベビーブームが起こり、その後成長した子供たちは、親に言われた服を着るよりも、自分たちで新たなスタイルをつくり出し、着たいものを着るべきと考えるようになった。つまり、大人に反抗したスタイルが生まれたのである (du Roselle1980=1995 年、391-392 頁 ; Steele1991 年、133

頁)。

大人に反抗したスタイルとして若者による若者向けのファッションが台頭してくる。1965年、アンドレ・クレージュがコレクションで打ち出したミニスカートは大反響を呼び、多くの若い女性がこの新しいスタイルに飛びついた。クレージュはコレクションの準備にあたって現代女性のことを以下のように分析している。現代女性は働く女性であること、男性との平等を望んでいること、そしてあるがままの肉体をみせるべきである、と。そこでミニスカートは、今までの長いスカートや、膝丈のスカートよりもいっそう動きやすいものになり、なにより、膝と太ももを露出することになった。この膝と太ももを露出することが大変な反響を呼んだのである。女性の脚は、「社会的な性の役割、つまり行動する性のシンボル (能澤 1994 年、146 頁)」であるため、女性が脚を露出することは良くないとされていた。女性が「性」を主体的に持ち主張することは認められないことだったので、女性は脚を隠すようにしなければならなかったのである。このような状況の下に登場したミニスカートは女性の脚を解放的に露出することで、女性の肉体の自由と性の解放を表現したのである。肉体の自由と性の解放ともいえるミニスカートは若い女性たちの共感をよび、広まっていった。そしてやがて大人も着るようになった。クレージュのミニスカートが大反響を呼び、多くの若い女性に受け入れられて話題になったのも、1960年代だからこそである (du Roselle 1980=1995 年、399-403 頁 ; 日置 2006 年、236 頁 ; 能澤 1994 年、145-147 頁)。

一方で 1960 年代アメリカでは「ニュー・フェミニズム」と呼ばれる今までの女性運動とは違う人々の意識自体を改革しようとする運動が各地で起こった。男女平等を求める女性たちは男性と同じような服装をした。伝統的な「女らしさ」から解放され、新しい「女らしさ」を手に入れようとしたのだ。そこで、ユニセックス・スタイルとなっていた T シャツにジーンズ、パンツ・スタイルなどを着るようになった。イヴ・サン・ローランが 1966 年に発表したパンツ・スタイルは、女性が公式の場でもズボンをはくきっかけとなり、ズボンはもう女性のワードローブの一つとなった。若い女性たちは脚を露出したミニスカートをはくことが多かったのだが、こうしたパンツ・スタイルやズボンは活動的な女性運動を行っていた女性たちが着用することが多く、ズボンは女性解放の願望と男女平等を主張するアイテムとなった (du Roselle 1980=1995 年、403-405 頁 ; 日置 2006 年、228-231 頁)。

第 2 項 主張するジーンズ

1960 年代なかばから女性のジーンズ着用は運動のユニフォームのように広まっていった。1962 年から女性のジーンズ着用が目立つようになってきており、その後 1964 年頃にはジーンズは学生運動には欠かせないものになっていた。この年カリフォルニア大学バークリー校のある学生が逮捕されそうになったときに、学生がパトカーの屋根に飛び乗り、演説を始めた。これがフリー・スピーチ運動の始まりだったのだが、この時に学生がジーンズをはいていたことが注目され、ジーンズをはく学生が増えたのである。その後、学生運動

がヴェトナム反戦運動や公民権運動と結びつくにつれて、ジーンズも広まっていった。ジーンズは抗議運動のユニフォームになり、若者の主張を表現していったのである(三井 1990年、168-170 頁)。

公民権運動では、黒人のジーンズ着用も広まった。黒人の中には以前から労働着としてジーンズをはいていた者もいたが、公民権運動が最盛期となるなかで、白人とともにより多くの黒人がジーンズをはいたのである。黒人女性たちは、公民権運動に参加することもあったが、女性権利運動にも参加していた。彼女たちは人種の平等と性の平等を求めて活動を行った。たとえば SNCC (Student Nonviolent Coordinating Committee ; 学生非暴力調整委員会) は人種も性も関係なく多くの学生たちが参加していた団体であるが、SNCC のメンバーの黒人女性たちは、伝統的な服装をやめてジーンズをはくようになったのである。黒人女性たちはあえて労働着であったジーンズを着ることで、労働者階級の人々と SNCC メンバーとの連帯感を強めた。白人に雇われ、白人に強いられた服装をしていた時代を脱ぎ捨ててあえてジーンズをはくことで階級、人種に縛られない自由を主張したのだ。ジーンズはメンバーの連帯感を強めて運動をいっそう効果的にし、人種の平等、性の平等を求めるうえでとても重要な役割を果たした(三井 1990 年、170-171 頁 ; Evans 1989=1997 年、424-428 頁 ; Ford 2013 年、638-646 頁)。

女性のジーンズ着用はヒッピーの間でも見られた。ヒッピーは、1950 年代末頃に現れたビートニク思想を引き継いで新たな活動を始めた若者たちである。ヒッピーは大量生産・大量消費の物欲主義・商業社会を否定し、「自然に帰れ」をモットーに原始的な生活を始めた。またキリスト教の価値観を否定し東洋の禅の思想を取り入れ、ドラッグ、セックスによる魂の解放・性の自由を体現していた。ヒッピーの服装にもこうした独特の思想が表現されていた。多くの男性は長髪でひげも長く伸ばし、Tシャツにジーンズ、もしくはフォークロア調の服装であった。そして女性は花柄のワンピースやサイケデリックな柄のミニドレスを着ていたが、中にはユニセックス・スタイルであるTシャツにジーンズを着ている女性もいた。ヒッピーの女性は、ジーンズをはくことで大人への反抗を示しながら、男性と平等の存在であること、女性の服装は自由であるべきという価値観を表現していたといえる。ジーンズはヒッピーの精神を表す重要なアイテムのひとつであった (du Roselle1980=1995 年、408-409 頁 ; 濱田 2009 年、218-219 頁 ; 日置 2006 年、227-228 頁)。

「ニュー・フェミニズム」と呼ばれたアメリカのフェミニズム運動でも女性はジーンズをはいた。彼女たちは、女性だからという理由で「女らしい」服装を押し付けられてきたことに反抗し、「女らしい」服装、女性固有の服装とされたものを脱ぎ捨てたのだ。そのなかでジーンズは、これまでの「女らしさ」の概念に反抗するものとして取り入れられるようになったのである。すでにユニセックス・ウェアとなっていたジーンズは、よりいっそうユニセックスの意味合いを強化されたのである(三井 1990 年、183 頁 ; 能澤 1994 年、120 頁)。

ジーンズはこうした若者に広く着用されていくなかで、「平等」のイメージ、「自由」や「解放」、「個性」などのイメージと結びついていったのである。学生運動、公民権運動、ヴェトナム反戦運動、フェミニズム運動、ヒッピーなどの運動すべてにみられたジーンズは、若者の主体的に「個」を主張する姿勢、「平等」を求める姿勢、「新しい価値観」をつくり出そうとする姿勢と結びつき、若者のなかでユニフォームのようになった。もはやジーンズは階級の壁、人種の壁、性の壁を越えた衣服だった。さらに言えば、人種の平等、性の平等を主張するのに欠かせないものとなっていたのである。女性にとってジーンズは意思表示のひとつとして重要な存在となっていたのだ。

女性のジーンズ着用は1960年代半ば以降、若者から広まり、やがて末頃には徐々に大人もジーンズをはくようになった。当時は急進的なファッションがおしゃれとされていたので、ジーンズは「おしゃれ」な服のアイテムとなっていたのである。「反抗」のイメージ、「新しい価値観」のイメージはまだ続いていた。「反抗」のイメージさえも「おしゃれ」として取り入れられたのだ。そして女性にも徐々にファッションアイテムとしてジーンズが取り入れられるようになっていき、一般化していった（三井1990年、184-190頁）。

以上のように1945～1960年代のアメリカにおける女性の服装は、戦後のベビーブーム世代に大きな影響を受け、若者が発信するスタイルが流行となった。特にジーンズは若者によってファッションに取り入れられるようになり、一種のユニフォームのようになった。若者の新しい価値観を模索する姿勢とジーンズは合致したのである。若者の考える新しい価値観がこれまでの「女らしさ」を拒否するきっかけを与え、それに伴って女性の服装はより「個性」的で「自由」なものになった。「ニュー・フェミニズム」からはじまる女性の「女らしさ」の概念への反抗と女性による女性のための新しい主張にジーンズは用いられるようになったのである。ジーンズは女性にとって彼女たちの新しいアイデンティティを主張する重要な「手段」であり、「メッセージ」だったのだ。

女性の服装には「女らしさ」の変化が表れており、「女らしさ」の変化にはその時の社会が関係している。女性がズボンをはくことが認められないことだった19世紀中頃からの女性の服装をみることで、女性の服装には「女らしさ」が深く関係していること、そして社会が関係していることが分かった。女性用ジーンズが1938年に誕生したことや、戦後のベビーブーム世代によってジーンズがファッションに取り入れられることも、その時代と社会、その時代の「女らしさ」の概念とジーンズが密接に関係していたからなのである。

女性のジーンズ着用が定着するには、変化する「女らしさ」と女性たちの意識の変化が不可欠であった。自ら「自由」と「解放」を求めて行動し、男女平等を主張し、男性に押し付けられた女性の在り方ではなく女性たち自身による女性のための新しい自己像をつくり上げることが重要だったのだ。そしてその際にジーンズは重要な役割を果たし、女性のジーンズ着用の定着につながったといえる。

終章

ジーンズは疑うこともなくわれわれの生活に不可欠なファッションアイテムの一つといえる。一つの労働着だった衣服が世界各地に普及しファッションとして一般化していることは注目に値することである。さらに注目すべきは、女性もジーンズを普通にファッションとして着用していることである。というのも、昔は女性がズボンをはくことは認められていなかったからだ。しかし、今では女性もズボンをはいている。その上、女性も男性の労働着だったジーンズをはいている。ではどのようにして、ズボンをはくことすら困難であった女性が男性の労働着であるジーンズをはくようになったのか。本論文では、19世紀中ごろから1970年ごろまでの女性の服飾史、アメリカの歴史、アメリカの女性史、ジーンズの歴史を概観していくことで、女性のジーンズ着用とアメリカ社会、そこからみえる「女らしさ」との関係性を考察してきた。

第1章では、19世紀中ごろ以降のアメリカで、女性がズボンをはくことは社会的に認められず、困難であったことを、当時の理想の女性像とその服装をふまえて考察した。そしてこのような女性がズボンをはくことが認められていなかった同時代に、リーヴァイ・ストラウス社のジーンズが誕生したことにも触れた。

第2章では、1930年代から1945年のアメリカをみることで、社会と女性の服装が密接に関係していることを明らかにし、女性のズボン着用とジーンズ着用についてアメリカ社会と当時の「女らしさ」をふまえて考察した。ズボン着用の一般化には、女性の「自由」と「解放」を求める姿が表れていた。大恐慌後のジーンズ着用は、一部の女性たちによるものだったが、第二次世界大戦中は、働く女性の作業着となり、アメリカ中の女性たちの間に普及したことがわかった。

1930年から1945年の間に「女らしさ」は変化した。1920年代頃に自ら社会に出て「自由」を求める女性が誕生した後は大恐慌が起こり、再び以前の伝統的な「女らしさ」が理想とされた。しかしその一方で女性のスポーツ界への進出は進み、活動する女性は徐々に増えていた。その後第二次世界大戦が始まり、女性は家庭にいるよりも、工場や戦場で働くことを求められるようになり、社会に進出し始めた。当時は、女性が国のために働くことは「女らしさ」を損なうことではないとされ、こうした「女らしさ」の変化にジーンズはうまく溶け込み始めていたことを明らかにした。

第3章では、1946年から1970年のアメリカ社会と「女らしさ」をふまえて、女性のジーンズ着用が主張する衣服として使用されるようになることで「自由」と「解放」、「平等」を求める女性には不可欠なものになったことを考察し、女性のジーンズ着用が一般化する過程を明らかにした。第二次世界大戦後、女性は家庭に戻るよういわれ、再び女性の家庭性が重視された。女性の服装も伝統的な服装に戻った。特に、ニュー・ルックと呼ばれた服装はその象徴ともいえた。しかし、この復活した「女らしさ」に異議を唱え始めたのはベビーブームで生まれた多くの知的な若者たちだった。若者たちによる新しい服装は「反抗」の象徴であり、ジーンズも重要な役割を果たしていた。60年代になると、今までアメ

リカ社会が避けてきた人種の問題、性の問題などがいよいよ問われ始め、さまざまな運動が起こった。その運動の際にジーンズは一種のユニフォームのようになり、女性も「自由」と「平等」を求めながらジーンズをはいたのだ。当時の女性がジーンズをはくことは、男性の労働着だったジーンズをはくことを意味しており、「平等」の主張がいっそう強く示されたのだ。さらに黒人女性もジーンズをはくことで、男女平等だけでなく人種の「平等」の主張も強化された。

70年代以降、ジーンズはファッション性の高いものになっていくが、女性のジーンズ着用の一般化には、「女らしさ」の変化が関係していた。女性の「自由」と「解放」、「平等」を求める精神にジーンズは強く結びつき、ジーンズは女性の主張をより一層強く示していた。社会が理想とする男に従順で、か弱く、家庭で夫や子供を養っていくべきとされた女性は、やがて社会に進出し「自由」と男女平等を主張した。ライフスタイルの変化が女性の服装に大きな影響を与え、ジーンズはそうした変化する女性のライフスタイルに沿うことができたのである。

女性のジーンズ着用は、「自由」や「平等」の意識とともに定着していった。女性自ら「自由」と「解放」、「平等」を求めて行動し、女性たち自身による女性のための新たな「自己像」を改めて体現していくためにジーンズは有効だったといえる。女性のジーンズ着用が一般化していく過程には「女らしさ」の考えの変化が不可欠だった。女性たちは、理想とされた「女らしさ」を脱ぎ捨て、その際に人種・階級・性の壁をこえた「平等」をあらわすジーンズを着用した。「女らしさ」の変化がジーンズに表れていたというよりもむしろ、ジーンズによって「新しい主張」が示されていたといえるのだ。

本論文の反省点は、ジーンズ自体のデザインの変化についてはあまり言及できなかったことだ。女性もジーンズをはくようになるが、やはり男性のジーンズとはデザインが異なっている。「女らしい」形のデザインであることも考慮に入れるとより、ジーンズと「女らしさ」の変化の関係が明らかになっただろう。

そして、1970年代以降もみていくことができればよりいっそう女性のジーンズ着用が定着していく様子が分かっただろう。リーヴァイ・ストラウスだけでなく、他社のジーンズも考慮に入れることができればよりジーンズとアメリカ社会の結びつきも分かっただろう。まだ女性とジーンズの研究は少ないので、今後、機会があれば研究してみたい課題である。

参考文献

- 有賀夏紀・紀平英作・油井大三郎編.2009年.『アメリカ史研究入門』山川出版社.
- 千村典生.1997年.『ファッションの意味を読む』グリーンアロー出版社.
- _____.1996年.『ファッションの歴史』平凡社.
- du Roselle, Bruno. 1995年.『20世紀モード史』(西村愛子訳)平凡社.(原書名: *La Mode*. Paris: Impr. nationale, 1980)
- Evans, Sara M. 1997年.『アメリカの女性の歴史: 自由のために生まれて』(小檜山ルイ・竹俣初美・矢口祐人訳)明石書店.(原書名: *Born for Liberty: A History of Women in America*. New York: The Free Press, 1989)
- Finkelstein, Joanne. 2007年.『ファッションの文化社会学』(成実弘至訳)せりか書房.(原書名: *After a Fashion*. Victoria: Melbourne University Press, 1996)
- Ford, Tanisha C. 2013. "SNCC Women, Denim, and The Politics of Dress." *The Journal of Southern History*, Vol. 79, No. 3, August, 2013, p.625-658.
- 濱田雅子.2009年.『アメリカ服飾社会史』東京堂出版.
- 日置久子.2006年.『女性の服飾文化史: 新しい美と機能性を求めて』西村書店.
- 堀真理子.2002年.「文化の変容」笹田直人・堀真理子・外岡尚美編『概説アメリカ文化史』ミネルヴァ書房.203-223頁.
- 出石尚三.2009年.『ブルー・ジーンズの文化史』NTT出版.
- Kava, Millstein Beth, and Jeanne Bodin. 1992年.『われらアメリカの女たち: ドキュメント・アメリカ女性史』(宮城正枝・石田美栄訳)花伝社.(原書名: *We, The American Women: A Documentary History*. Chicago: Science Research Associates, 1983)
- 古賀邦子.1998年.「アメリカ」井上洋子・古賀邦子・富永桂子・星乃治彦・松田昌子『ジェンダーの西洋史』法律文化社.69-95頁.
- 三井徹.1990年.『ジーンズ物語』講談社.
- 成実弘至.2008年.「メディア文化研究の射程: 英米ファッション研究の概観と日本における展開の可能性」『デザイン学研究特集号』16巻1号.2-7頁.
- 能澤慧子.1994年.『20世紀モード』講談社.
- 佐々井啓編.2011年.『ファッションの歴史: 西洋服飾史』朝倉書店.
- Steele, Valerie. 1991. *Women of Fashion: Twentieth-Century Designers*. New York: Rizzoli.
- 高岡朋子.1998年.「女子学生の服装と男女平等主義的性役割態度との関係」『北海道女子大学短期大学部研究紀要』34号.97-108頁.
- 谷口雅子.2005年.「ブルマーと近代化: 解放と抑圧のはざままで」高橋一郎・荻原美代子・谷口雅子・掛水通子・角田聡美『ブルマーの社会史: 女子体育へのまなざし』青弓社.55-92頁.

宇野保子.2007年.「ジーンズ・カジュアルファッション」『中国学園紀要』6巻.29-38頁.
Wilcox, R. Turner. 2004. *Five Centuries of American Costume*. New York: Mineola.